

2020（令和2）年度 京都大学 入試問題 理系 第2問 解答例

問一

深い闇が光と対立・相克し調和する関係において生じる、日本人の精神や文化全体、人間全体にとっても重要な陰翳の作用が、闇の喪失とともに身辺から失われるという意味。

* 「闇」の喪失が危機であるとする「意味」は、「私たちの身の回りから「闇」がなくなり」だした限りでの「危機」であり、また、「陰翳の作用」の喪失につながる限りでの危機である。したがって、解答に以下の二要素が必須。

- ① 「身辺の闇」の喪失であることの指摘。
- ② 「光りと闇」＝「陰翳」だから「闇の喪失」＝「陰翳の作用の喪失」という指摘。

問二

近代化と電灯の普及により闇の領域が人々の身辺から消滅し、人間の完全な管理下に置きえない前近代的な、妖怪を連想させる深い闇への恐怖も消失したと考えられるから。

* 傍線部中の指示語「それとともに」の指示内容＝「闇の領域が人々の身辺から消え（るとともに）」の明示が必須解答要素であるのは、当然である。

* 「闇の消失」とともに「妖怪たちの姿も消え去ってしまった」と言う理由の説明には、「闇」と「妖怪」との本文中での関係づけを指摘する必要がある。「妖怪」とは「闇」と同様に「人間の完全な管理下に置」きえない「前近代」的な「恐怖」の象徴であり、近代化の「光（合理主義による自然支配の象徴物）」によって消失していく運命にあった。

* 問三とは異なり、「言うのはなぜか」であるから、「～と考えられるから」などで結ぶ。

問三

大正童謡が流行った当時は、まだ前近代的な深い闇の恐怖空間が残存しており、大人たちの精神は陰翳の作用に影響され、明暗を印象づける大正童謡に共感しやすかったから。

* A「大正童謡」がB「大人たちの心情」に訴えかけることができた理由は、AにBが共感・共鳴しうるからである。すなわち、「明るさと暗さが漂う」Aが、ある理由でBの共感を誘うからである。とすれば、解答の必須要素は、「大正時代の大人たちの精神的特徴」にあることは明らかである。本文では「陰翳（＝光りと闇の織りなすもの）の作用」が「日本人の精神」にとって「重要」であったと明記されているので、その指摘が解答の根幹となる。